



鈴木栄一著

環境統計学——情報処理の考え方——

続環境統計学——情報処理の実際例——

地人書館, 1979, 菊版, 201頁, 253頁, 2300円, 2500円

気象研究所も、かつては、増山元三郎、小河原正己など界外の碩学を擁していた。著者は、これらの人々の指導の下に永らく気象統計の研究に従事し、予報研究部第4研究室長を経て、青山学院大学へ転じた人である。応用統計一筋の人だけに、何げなく書いてある一言半句に著者の人柄と数々の苦勞の積み重ねが窺われる。

本来、環境問題は数値で表現できない無数の問題を含んでいる。統計学でも何学でも、引っ掛かってくれればよい方である。それでも、永い間の関係者の血のにじむような苦勞の結果、今日漸く環境影響評価の手法として固まりつつあるし、法制化も何とか見込まれそうな気配になってきた。

以上のような状況ではあるが、未開の分野も非常に多いことも事実であり、統計学の果たす役割もきわめて重要である。新しい統計手法や新たな適用例の集積を、積極的に進めることが急務である。その意味で本書は、ま

ことに時宜を得た出版であると言ってよい。

2冊の著書の副題が、それぞれ、

環境統計学 ——情報処理の考え方——

続環境統計学 ——情報処理の実際例——

となっているが、何れも環境問題の実際例を中心に種々の統計手法を解説している。

前者の目次を見ると、測定値統計と回帰、極値と計画値、情報理論、特殊な統計処理、予測の方法、判別分析と予測、都市・交通、大気汚染データの処理 などの項目が取り上げられている。さらに、多変量解析、数値分類、ダミー変数、数量化手法 などについても解説しており、環境統計学の基礎といった印象が強い。

後者は、環境計測と基本的データ処理、環境データの相関分析、環境データの多変量解析、環境影響評価の諸手法、大気汚染の予測とシミュレーション、カルマンフィルターの応用、GMDH 手法の応用 などの諸項目が取り上げられており、前者と比較すると特に応用的な傾向の強い内容と言える。

環境統計学という名前は初めてであるが、著者も言っているように、統計学に学問的国境はなく、充分主張し得る名称である。多少、項目の配列に苦勞したようであるが、環境問題を担当する現場の人にとってはたいした問題ではない。自分の抱えている問題が、どの章を読めばよいか、一目でわかることの方が重要のような気がする。

(広瀬元孝)

第13回夏季大学講座開催場所変更のお知らせ

第13回夏季大学講座（昭和54年7月）の開催場所は、都合により、**学士会館から、例年のとおり気象庁講堂に変更しましたので、お知らせします。**

日本気象学会秋季大会講演申込用紙は、5月号に挿入すべきでしたが、手違いにより、本号挿入となりました。